

『今昔物語集』卷二の構成について

福澤真希

『今昔物語集』卷二は天竺部の他の巻に対し、説話配列の意味や巻を構成した意図が特にわかりにくいにも拘わらず、その構成についてほとんど議論されることがなかったという点で、特殊な存在であるように思う。卷二全体について言及する先行研究はあるが、撰者の構想と巻の構成がどのように結び付き、どのように表現されているのかについて検討されていないという点で、いずれも納得のいくものではなかった。例えば卷二の構想について国東文磨氏は次のように述べている。

そこで「今昔」撰者は、震旦部の、ついでは本朝部の經典説話に対するものとして、この前身因縁話を集めそれで卷二を一貫せしめて、天竺部の經典説話としようと考えたのである。(略)かくして卷二は、天竺の〈法〉賞讃の巻と考えるのである。^{〔1〕}

卷二が天竺部の「〈法〉賞讃」を表現しているとしても、個々の説話がそれぞれなせ卷二に入れるにふさわしいとされたのかを国東氏は説明していない。とにかく説話に「〈法〉賞讃」の要素が見られれば、あとは二話一類様式の連想に随って配置していったのだと国東氏は考えたのだろうか。各説話の必要とされた理由が「〈法〉賞讃」

の要素を持っており、連想に合う要素を持っているためであると考えれば、言っていることはわかりやすいが、善因善果譚、悪因悪果譚という大きなまとまりが存在しているのは明らかなのに、そのまとまりが作られた理由が説明されないことにも不満が残る。

一方で池上洵一氏は卷二全体の内容を「教化」であると指摘し、説話を次のように内容別に分類している。

- 1～2 仏の父母 3～5 仏の前生・因縁 6～7 仏弟子の教化 8～27 仏の教化（善因善果）
28～41 仏の教化（悪因悪果）

説話の分類と内容には共感できるが、この分類から撰者がどのような「教化」を表現しようとしたのかが分からない。池上氏の分類は卷二の構成について先行研究の中で最も詳細に検討されていると言える。しかし逆に言えば卷二はこれ以上分解されたことがないと言える。特に池上氏の分類の中でも卷の大部分を占めている「仏の教化」の内容は「善因善果」と「悪因悪果」としか言われず、これでは撰者が「善因善果」や「悪因悪果」の話をどのように受け止めていたのかがわからない。「善因善果」や「悪因悪果」より細かく調査・考察することでより具体的な撰者の意図に迫ることができるのではないかと思う。本稿は、卷二の構成を細かく検証することで、撰者が卷二を構成するにあたって、どんなことを考えていたのかを明らかにしようとするものである。

卷二は各説話の話題から考えて、大きく三つの説話群に分けることができる。一つ目は1～7の冒頭部であり、これは卷二の時代的な背景、卷二でどんな話題を展開しているのかを説明する役割を持っている。二つ目は8～27の善因善果譚であり、前世で善い行いをした者が現世でどんな果報を受けているのかを話題にした説話群である。三つ目は28～41の悪因悪果譚で、善因善果譚とは反対に、前世で悪い行いをした者が現世でどんな果報を受けているのかを話題にした説話群である。次の章から、それぞれの説話群について考えていきたい。以下

『今昔物語集』の本文は全て新日本古典文学大系三三二『今昔物語集 一』（今野達校注 岩波書店 一九九九年）に依り、引用の際は頁数を記した。³⁾

一 冒頭部の説話群

卷二の冒頭部である1〜7の説話群の中には、卷二のテーマや時代設定に関する話が見られる。2「仏為摩耶夫人昇忉利天給語」は、簡単に言うと、釈迦が、忉利天に生まれ変わった母、摩耶夫人を救い、忉利天に逗留する話である。先行研究ではほとんど問題にされないが、この話には次のような記述が見られる。

仏鳩摩羅二告テ宣ハク、「汝子閻浮堤二下テ可語シ、我レハ不久ズシテ涅槃シナムトス」ト。（一〇五頁）

これは釈迦が摩耶夫人を救った後、「其ノ座ノ大衆（一〇五頁）」の要請によって忉利天に三か月滞在して説法をしたという記述の後に書かれたものである。釈迦が「涅槃」するというのは、この場合釈迦が死ぬということである⁴⁾、釈迦の死が実際に語られるのは卷三の31であり、当然それまで釈迦は生きている。ここで何が気になるかと言うと、卷二の2に涅槃予告がなされるのは早すぎるということである。これ以降卷二で釈迦の老いや弱っていく姿が描かれることはないから、この記述は大した意味もなく出てきたかのように思われるだろうが、卷二の冒頭にして既に釈迦の死に関する話題が出てくることは、やはり意図的であると考えるべきだろう。この涅槃予告は普通に考えて2の舞台が、釈迦が間もなく死ぬ時期であることを示している。そうであるとすれば釈迦はかなりの高齢になっっているということになる。それについては2の冒頭に次のような記述がある。

今昔、仏ノ御母摩耶夫人ハ、仏ヲ生奉テ後七日ニ失セ給ヒヌ。其後、太子城ヲ出テ山ニ入テ六年、苦行ヲ修シ

テ仏ニ成給ヒヌ。四十余年ノ間、種々ノ法ヲ説テ、衆生ヲ教化シ給フニ、摩耶夫人ハ失セ給テ切天ニ生レ給ヌ。
(一〇四頁)

この記述を見る限り、ここでは釈迦が仏になってから既に四十余年が経過しているのである。釈迦が高齢であることは疑いないであろう。

ただこの記述を含む『今昔物語集』に見られる釈迦の年齢に関わる記述には、竹村信治氏が、

たとえば、釈尊の涅槃に至る間の時間は、巻一第4話・同第5話・巻二第2話・巻三第28話・巻六第1話によって、十九歳出家・六年苦行(二十五歳成道)・四十余年間説法教化・八十歳入滅と説明されるが、これでは明らかに計算が合わない。⁵⁾

と指摘したように、本来二十五歳の成道から涅槃の八十歳までの間は五十五年あるはずなのに、説法期間が四十余年となっているという問題がある。つまり説法期間四十余年が終わった時点が八十歳と見てよいのかどうかははっきりしないのだが、計算が合わないことがわかっていても、巻二の2の冒頭の記述の通り、2は四十余年が終わりつつある時期であり、涅槃予告がなされている以上、何年も前であるはずはなく、死ぬ一年以内ぐらいの時期が想定されているのではないかと思うので、四十余年が終わると八十歳になるのではないかと思う。巻二の2から巻三の31までの間が長いこと、仮に巻二の2から巻三の31までの話が死ぬまでの一年以内の出来事だとすれば、あまりに釈迦の移動距離が長すぎるのではないかといった点も気にならないではない。ただ少なくとも移動距離については『今昔物語集』の釈迦は巻二の1や40に見られる移動に関する便利な超能力を備えている。⁶⁾というわけで、2に設定された時期は切利天滞在期間である三か月を含むと、釈迦の死の1〜二年前であろうと思われる。そしてそれは、涅槃予告の記述を持つ話が巻二の冒頭に配されていることから、巻二全体に流れる時間もまた釈迦の死を見据

えた時期であるということが言える。

釈迦の死を予告された時代という設定が示すものは、まず悲観的な雰囲気があることはあるということが言える。そしてもう一つ、巻一ではどんな者でも救うという活発な救済活動をしていた釈迦が、巻二になると人々が自分では分からない前世からの因縁を教えるのが主な役割となる。そこから現世の行いが未来世にどのような影響をもたらすのかを考えさせることによって、読み手に救いの道を示している。そこで「やがて訪れる釈迦のいない世界で、人々はどう生きるべきか」ということを釈迦が教えるのが巻二であって、その答えが8〜41の前世に関する話で語られているということである。つまり2に見られる涅槃予告の記事は、8〜41の善因善果譚、悪因悪果譚の前提（必要性）を示していると思われる。

冒頭部の説話群の中で、巻二のテーマが語られていると思われるのが5「仏人家六日宿給語」である。この話は3、4に続いて、釈迦の前世が話題になっている。釈迦が舍衛国の人の家で六日間の供養を受け、七日目の朝帰ろうとしたが、自然災害が起こった。家の主と弟子たちが釈迦をその家に引き留めようとするが、釈迦は「そんなことはできない」と言って、前世での行いのために七日目はその家に留まれないことを教え、耆闍崛山に帰る。この話の中で、前世からの因縁があることを認識させようとする、同じ趣旨の言葉が二度に亘って出てくる。一つは釈迦が家の主と弟子たちに対して言ったことの中に出てくる。

一言ノ詞ヲ交へ、一宿ノ契リヲ成ス事ハ、皆是レ前世ノ業因也。(二二二頁)

もう一つは物語が終わった後、結語として出てくる。

然レバ、一言・一宿モ皆前世ノ契リ也ト知リヌトナム語り伝ヘタルトヤ。(二二二頁)

これらの言葉は要するに、「どんな些細な事も全て前世の行いによって決定したことである」といったような意

味であろう。ここで繰り返し前世の行動が現世を決定づけるということを書くことで、前世という話題に注意を向けさせることになるだろう。前世を知る事にはどんな意味があるだろうか。巻一には釈迦、つまり仏がその性質の善し悪しに拘わらず、一切衆生を積極的に救う存在であるということが構成の中で表現されていた。⁷しかし巻二の冒頭で既に釈迦は間もなくこの世を去ることがわかってしまった。そうすると一切衆生は救済者を失い、あらゆるトラブルから身を守ることができなくなってしまふ。釈迦が死ぬことが決まってしまった以上、救済者からの救いを待つ以外に、一切衆生が救われるための、他の方法が新たに必要になる。その新たな方法に密接に関わってくるのが前世なのである。前世が現世を決定するということは、現世が未来世を決定するということである。現世で何らかの手を打てば、未来世のトラブルを避けることができる。つまり救済者に頼らないタイプの新しい方法とは、誰にでも可能な善業・悪業を知ることによって善を行い、悪を行わないようにするという、果報をコントロールする方法なのである。

話を戻すと、5で全ては前世での行動が現世を決定づけていることを強調しているのは、巻二のテーマが前世を語ることにあることを示し、その裏には誰もが救済者の手助けなしに救われる方法を教えようという意図があると考えられるのである。

以上のように冒頭部の説話である2と5から、巻二のテーマと設定された背景を読み取ることができた。次に冒頭部の説話全体がどのような意味を持って配されているのか、考えていく。

1と2は釈迦による両親の救済及び両親との最後の別れという点で共通している。2の重要性については既に述べた通りであるが、1が2に先行した訳は、2が母の話であるのに対して、1が父の話であったためではないかと思う。1と2が冒頭に置かれたのは、巻一に続く釈迦の救済活動を話題にしているためであり、父母という釈迦に

とつての重要人物の死と別れの話であるため、そして冒頭に死と別れの話を書くことで、巻二全体に死や別れの雰囲気があることを印象づけようとしているためであることなどが考えられる。釈迦の父の死は、釈迦がもはや若くはないことを思わせ、また釈迦自身もいずれ死ぬということをおぼせさせる。また重要人物の死は天竺部全体の時間の進行をも表していると思われるが、巻一の最後ではなく巻二の始めに配置したのは、時間の進行を表すこと以上に巻二が既に釈迦の死や別れを想起させる巻であることを示そうとしたからではないかと思う。

3〜5には釈迦が現在の状況に関わる自らの前世での出来事を説明する描写がある。なぜ釈迦が前世の出来事を語るのかと言えば、いずれの場合もまず釈迦がその場にいる者にとって理解できない行動をとり、それを見た者たちが不思議に思つて行動の理由を尋ねたり妨げようとしたりするので、それに答えるためである。3では釈迦が人々に見捨てられた病気の比丘をわざわざ単独で訪問し、「恩返しだ」と言つて病気を治し、救済している。4では釈迦が伽頻国の一つの卒堵婆を礼拝し、5では釈迦が自然災害の中、人々の引き留めるのを振り切つて帰ろうとする。いずれもそばに帝釈天や弟子たちがついていて、釈迦の行動を理解できないのは、それが釈迦だけにしかわからない、前世からの運命による行動だからである。つまり3〜5は釈迦が身近な者（弟子や帝釈天）に、一切衆生に前世があり、前世が現世に影響していることを教えるという点で共通している。言い換えれば釈迦を教育者として表現し、まず身近な者を教育していると言えよう。3にも救済の要素があるが、巻一から巻二の1、2のようにこれまでの釈迦は特に理由を言わずに人々を救つてきた。しかし3では前世に善を行う優婆塞であった釈迦を助けたから、現世で釈迦が病気の比丘を救つたということになっている。全ての人々や動物に前世があり、前世の行動によっては救われるべき理由（原因）があるということをおぼせているのである。3〜5は釈迦の活動内容の変化を表している。なお釈迦の前世の内容は4が前世で父のため身を犠牲にし、現在仏になつ

たということ、釈迦にとっての善因善果であり、5は前世で死にかけている人を六日間温めて救ったが、七日目には死なせてしまい、そのために現世では自然災害の中家を出なければならぬということ、釈迦にとっての悪因悪果となっていると思われる。

6・7は内容の上では貧しい女性が精一杯の布施によって天人に生まれ変わるといふ、現世から未来世までの善因善果譚として、非常によく似た話になっているが、両話は釈迦の高弟である迦葉と迦旃延の救済活動という要素も持っている。おそらく両話は3・5の釈迦の教育の話を受けて、釈迦の次を担う救済者として、弟子たちの活動を見せているのではないかと思う。

1・7の説話配列をまとめると、1と2は釈迦の父と母との最後の別れ、3・5は釈迦による弟子の教育、6と7は弟子の救済活動が表現されているのではないかと思われる。これらは時代背景を明かし、テーマを必然的であるように見せて、時間進行をも意識した構成になっている。

二 善因善果譚の説話群

続いて8・27までの善因善果譚の説話群の構成について考えていきたい。これらの話は現在異常な幸運に恵まれている者が、釈迦の説明によって、前世に善い行いをしていたことが明かされるといふ形をとっており、全体的に見て現世での結果よりも前世での行いに数々のバリエーションが見られる。原因に注目しているのは、善因善果譚に限らないが、果報をコントロールする方法を教える趣旨で説話が集められているためであろう。次に、説話群を構成する小規模の説話グループがどのような意味をもって配置されているのかを分析する。

8〜13は本人たちが自主的に善い行いをしたという点で共通し、一括される。善い行いの内容は、8が貧乏な夫婦が協力して、拾ってきたもので精一杯の布施をする。9は貧乏な人が比丘に心を込めて、ただの砂を用いて供養する。10は貧窮を極めた人が一日に稼いだ銭を仏と比丘に布施する。11は長者が王の善行を喜んで塔に少額の布施をする。12は大長者が泥の仏像の欠けた指の部分を修理する。13は貧窮を極めた妻が、夫婦の間に一枚しかない帷子を比丘に布施する、というようにどれも異なっているし、行いを実行するにあたっての難易度も低いものが描かれていると言える。どんな規模の善い行いでも、自分から進んで行うことが大事であるという意味がこれらの説話から読み取れる。8〜10は貧しい人々が比丘や仏に布施・供養を行っていて、善因善果譚の冒頭には貧しい者が自主的に精一杯の布施・供養を行った話が置かれていることになる。これは最も望ましい心がけのあり方を提示するのと同時に、善行に伴う物品の価値がいかに低くても構わないということを教えていると思われる。続く11と12は長者による布施・仏像修理であるが、これらも身分に似合わず内容が慎ましやかである。長者が自主的に善行を行ったエピソードを必要としてここに配したのかもしれない。12に関しては、前世の悪行が絡んできていて、明らかにストーリー展開が他とは異なっているが、〈母を罵った〉話題と〈善い行いの果報が逆境時に失われない〉話題があり、撰者の関心を引いたため採用され、また長者が自主的に善行を行ったエピソードであるためこの場所に置かれたのではないかと思う。13は8〜10のような貧しい人による布施だが、夫婦の衣服を完全に失うという困難を受け入れての布施であり、8〜12の集大成ともいえる強いインパクトがある。布施を受けた比丘が「清浄ノ布施、此ノ量ニ過タルハ無シ（一二九頁）」と絶賛していることから、大変に宜しい布施の例として説話グループの最後に置かれたのであろう。なお8から始まる自主的な善い行いが13で終わっているが、8と13には13の主人公・叔離の前世に出てくるのが8と同じく貧しい夫婦であるという共通点があるため、共通点のある二話が最初と最後に配

置されているということが言える。

14～16は他人の善い行いを真似する、あるいは羨ましく思うことで善い結果を得たという点で共通する。8～13と異なり、自ら進んで善い行いをしなくても効果は保障されるということになる。14は阿育王の善行が先に語られているが、説話グループのもつ意味から考えるとこの話の主人公は後に出てくる阿育王の下女で、阿育王の善行に感化されて善行を行い、王の娘に生まれ変わった。15の主人公は「須達長者蘇曼女生十卵語」というタイトル及び前半の内容から一見、蘇曼のように思われるが、これも説話グループのもつ意味から考えて、蘇曼の十人の息子たちであろう。前世で破損した塔を修理する老母を手伝った年若い十人の人たちが、現在の十人の息子たちであった。その時の老母が現在の蘇曼であり、塔の修理を終えた後その場にいた十一人が未来世に母子・兄弟となることを望んだため、現在母子・兄弟になった。善行を真似した、共に行った者同士が親子になったことは14に似ている。16は賤しい人が、一瞬比丘のように香を焚きたいと思った（羨んだ）ことで善い結果を得た。この話に至っては善行を行ってすらいないが、釈迦によって未来世に仏になることが保証された。善行に近づきたいと思うことが基本的な大事であると考えられたのだろうか。16は14、15よりも低いレベルの行いが最高難度の善い結果をもたらしているということ、14、15のまとめの意味で後に置かれたのだろう。14～16が8～13の次に置かれたのは、自主的な善行を勧める話から、人の善行を手伝ったり、感化されたりするという便乗型の善行でも、善果を得る方法として有効であることを示す意図があったからだと思われる。話題の展開上の都合を考えた配置であり、時間の進行が特に意識されているとは考えにくい。

17・18は全体的に見て、塔の修理をしたことの効果が話題となっているが、17の後半の瓶沙王の話と18の金地国の王の話から考えて、善行には多くの人々を勧誘して行くと、それに携わった多くの人々も救われるため、より望

ましいという意味をもっているのではないだろうか。これらは14ゝ16の便乗型の善行を、善行に携わった人数を増やすことでさらに発展させた話題であるため、ここに位置していると思われる。

19ゝ21は寺及び比丘に対して灯明を掲げる、病気の比丘に薬を与える、寺の庭を掃除するなどの善い行いをした人が善い結果を得たことが共通している。8ゝ18では善行を積極的に行ったかどうかが主に話題にされていたが、ここからは善行の内容（善行を行う対象と方法）が主な話題になっている。話題が変わった理由はおそらく、心がけについては8ゝ18までで十分と考えたからであろう。善行の内容は8ゝ18以外の行い（灯明を掲げる、病気の比丘に薬を与える、寺の庭を掃除する）が取り上げられている。布施や塔の修理以外にどうすれば善業を作れるのかを教えようとしたものである。なお19ゝ21にはそれぞれ他にも採用理由があると思われる。

19は結語に

カ、レバ、心ヲ発シテ仏ニ灯明ヲ不奉ラズト云ヘドモ、盜ヲセムガ為ニ灯明ヲ挑タル功德如此シ。況ヤ、心ヲ発シテ奉リタラム功德可思遣シトナム語り伝ヘタルトヤ。（一四三頁）

21も同じく結語に、

然レバ、心ヲ不発ズシテ、人ノ言ニ随テ寺ノ庭ヲ掃治シタル功德、既ニ如此シ。何況ヤ、自心ヲ專ニシテ寺ノ庭ヲ掃治シタラム人ノ功德可思遣シトナム語り伝ヘタルトヤ。（一四六頁）

とあり、善い行いをした動機が不純であろうと、機械的にしたことであろうと効果は期待できるということで、14以降と同じく、自主的でなくても効果が保証されることを強調する意図もあったと思われる。20は数々の苦難に対して常に善果が発揮されていたということ、12のように（善い行いの果報が逆境時に失われない）話題があったこともこの話が採用された理由に関わってくるだろう。

22・23は困っている人への親切（慈悲深い行為）が善い結果をもたらすという話題が共通する。内容については、22は雨が降って困っている人に笠を与えたこと、23は山の中の孤独な病人を看護し養ったことであり、こちらも心がけよりも善行の内容が話題になっている。22は結語に比丘への供養に言及し、話題を21以前のものに戻そうとしているようにも見えるが、おそらく俗人に親切にするよりは、比丘に親切にした方がより高い善果を期待できるということ、より効果的な方法を提示しているに過ぎないだろう。23は善い果報の規模が甚だしいが、悟りを開いておらず、似た話の20よりも結果が劣っているため、後の方に配置されたことが考えられる。

24、25は〈善い行いの果報が逆境時に失われない〉という話題が共通している。前世の善い行いによって得た幸運は、どんな障害に遭っても絶対に効果を發揮し続けるということを教えようとしているようである。24は波斯匿王の娘・善光女の話で、王は娘を溺愛するあまりに「お前は私の愛情によって恵まれた境遇にある」といった趣旨のことを言うと、善光女は「特に嬉しくありません。善い報いも悪い報いも前世によって決まっているからです。この境遇は前世の報いです」と答えた。王は怒って善光女を乞食の妻にして、王宮から追放した。しかし善光女は結局前世の報いによる幸運が身についていたために、乞食の夫は美しくなり、財宝を発見して王宮を上回る住居に暮らすことになった。王の嫌がらせによって善光女の善果が弱まることはなかったのである。25は波羅奈国の大臣の息子・恒河達の話で、成長した後出家を望んだが親に許可されなかった。そこで恒河達は新たな生涯で仏道に入ることに望みをかけ、投身、服毒などの方法によって死のうとしたが、どうしても死ねない。わざと罪を犯して処刑されようとするが、処刑のため恒河達に放たれた矢は、三度とも跳ね返り、傷つくことはなかった。結局釈迦の説明によって、恒河達の前世の善報が発現していたことがわかり、恒河達は無事出家した上に、阿羅漢となった。つまりこの話では、自分の死にたいという強い意志にも左右されることなく、善果の効力が發揮され続けているの

である。他人の妨害はおろか、自分の意志にさえも打ち勝つほどであれば、善果の効力の絶対的であることは疑い
ないであろう。19〜23までの善い行いの内容から、今度は善果の絶対的な効力に話題が移っている。このような話
題は12、20、40にも見られることから、特に撰者の関心が大きかったことが想像される。いくら善い行いを勧め、
善い結果の例を数多く示したからといって、発現した善い結果が、他者の妨害に対して無力であったり、他の時に
してしまった悪い行いによって相殺されたりしてしまうようなものであったならば、人々がやる気を出して善い行
いを実践する気になれないかもしれない。特にこれらの方法を実践すべきであると撰者が想定しているのは、仏の
いない時代の人々である。前世や未来世がどうなっているか、善果がどのような形で表れるのか、仏なしでは全く
わからない人々にとって、善果の効力の絶対的であることは、保証されていなければならないのである。そのため、
善い行いへの心がけ（態度）、善い行いの内容の次に、〈善果の絶対的な効力〉を話題にした話が置かれていると
考えられる。

最後の26、27は不完全（中途半端）な善い行いによって善果を得たという話題で共通している。26は前世で五戒
を保とうと思ったのに、五戒全てではなく不殺生戒のみを守った善報によって命が助かり、二国の王となった王子
の話で、27は前世で乞食沙門に豊かな家を尋ねられた時、指差して教えた善報によって神に生まれ変わり、指先か
ら甘露を降らせる超能力を得た神の話である。26は五戒を全て守らず、不殺生戒だけ守るということでは不完全であ
り、27は自分で布施をする、あるいは自分から乞食沙門に親切にすることとはせず、質問に答えただけであ
り、普通に考えて親切ではあっても高く評価されない行いである。これらのような不完全な善い行いによっても、
かなりの善報を得られるということがわかるようになっていく。なお不完全さにおいては16の〈一瞬香を焚くのを
羨んだ〉ことも同じであるように思われるが、16は他人の善行を羨むという要素が強かったため、26や27とは分け

られたのだろう。これらの話が善因善果譚の最後に置かれたのは、不完全な善い行いなのにかんがりの善果をもたらすということ、一つには善行に数えられる行いの規制の緩さ、真面目に取り組まなければならないとか、五戒は完全に守らなければならないといったことを言わない仏の教えの寛容な部分を伝えようとしていると言える。もう一つには、たいしたことのない行いに対しても善果の効果は大きいということで、これまでの話の集大成として善行のやりがいを伝えようとしているようである。

8〜27の説話配列をまとめると、8〜13は自主的に善い行いをするのがよいこと、14〜16は他人の善い行いを真似する、羨ましく思うことも善い行いとして有効であること、17・18は善行に多くの人々を勧誘して行うべきであること、19〜21は寺及び比丘に対して善い行いをするのがよいこと、22・23は困っている人への親切も善い行いとされること、24・25は善果には絶対的な効力があること、26・27は不完全な善い行いも有効であることが表現されていると考えられる。これらは全体として善因善果の話題を善行として望ましい方から順に展開しており、未来世に善い結果を得るための方法を教え、読み手に実践させようという意図があるようだ。もっと具体的な撰者の思いを考えてみると、どんな小さなことでもよいから善い行いをして、善果を得て欲しいという願いがあったように思われる。またここで語られている善い行いは、行為者と行為とのバランスがとれていて、自然になっているので、〈このような立場にある人はこのような行為をすべきである〉ということが言われていると見ることもできる。この説話群には時間の進行を表す配列は見られなかった。

三 悪因悪果譚の説話群

次に28、41までの悪因悪果譚の説話群の構成について考えていきたい。

28、29は現在最高の善果を受けているはずの者たちが、前世の悪い行いによって悲惨な死を遂げるという点で共通する。28に登場するのは釈迦の一族である釈種で、冒頭にもとりわけ貴い一族であることが説明されている。29に登場するのは、王を始めとし人々に尊敬される阿羅漢である。このような人物でも悪果を受けるということで、誰にでも悪果が現れることが、悪因悪果譚の説話グループで言われていることになる。この二話にもう一つ共通するのが前世の悪い行いで、28では飢饉のため、池の魚を取って食ったこと、29では大自在天に祀るため羊の四本の足を切って殺したことであり、両方とも生き物を殺したことが言われている。そのため28の釈種も29の阿羅漢も地獄に堕ちたことになっている。殺生をした者が地獄に堕ちたことから、生き物を殺すことが最も重い罪であるということも教える上でも、殺生の罪の話題が冒頭に置かれたように思われる。また28では殺した魚の生まれ変わりである流離王によって釈種らが虐殺され、29では殺した羊の生まれ変わりである婆羅門の妻の思惑によって阿羅漢が殺されており、前世と現世で加害者と被害者とが入れ替わっている。未来世に加害者が被害者に仕返しをされるということが起こる悪果の性質について、29の中で釈迦の言葉として、次のように言われている。

殺生ノ罪世々ニ不朽ズシテ、互ニ殺シ、其ノ報ヲ感ズル事如此シ。(一七二—一七三頁)

「互ニ殺シ」という部分が28、29の状況に合っており、29で二話のまとめとして言われているようである。二話で扱われているのは殺生という重い罪ではあるが、人殺しではない。特に28はそもそも普段から漁業を営む村での、

飢饉という非常事態の中で起こった出来事であった。悪果を受けないために殺生を避けることはもちろん望ましいことであろうが、殺生を避ける、悪い行いをするなど言いたいがためだけに、撰者は悪因悪果譚を扱っているのだろうか。

30・31には悪果によって肉親の死という不幸に遭う女性が出てくるが、他に悪業を作ったのとは別の前世で善業を作ることによって救いを得ている点が共通する。おそらく30・31は救いが描かれる点に説話の採用理由があるのではないかと思う。28、29でも釈種は死後天に生まれ、阿羅漢は悟りを開いているので救われてはいるのだが、28では悪果によって殺された後のことであるし、29は善因が描かれなかったため、悪果の印象だけが強くなっている。30の毘舍離は三十二人の息子たちを夫である波斯匿王に殺されてしまう。王が送ってきた箱の中に息子たちの頭部が入れられていたが、開封する前に釈迦に止められ、説法を聞いて悟りを開く。そのため箱の中身を見ても嘆き悲しむことはなかった。毘舍離がこのような目に遭ったのは前世で三十二人の人が一頭の牛を殺したのを喜んで食ったから、そして別の前世で塔に香油を三十二人の人と一緒に塗ったからであった。この話にははっきりと悪果と救いが描かれている。31の微妙比丘尼は前世で新しい妻の子を針で刺し殺し、殺害していないと呪誓をしたために、肉親を次々と亡くし不幸な目に遭ったが、一方別の前世で辟支仏に食べ物を布施したために釈迦に会って出家し、阿羅漢になることができた。こちらの現世でも肉親を失うという悪果と、悟りを開くという善果が描かれている。これらの話には悪果を受ける中で救いを得る方法が描かれていることから、現世を生きるため、悪い行いを避けること以外に救いの道が開かれていることがわかる。悪い行いをしてしまった場合にも、取り返しがつくようにとの配慮がなされているのである。撰者はおそらく人々が止むを得ず罪を犯してしまうことがあるということを確認、悪い行いを避けられなくても何とか救われる道が見つかるようにということを考えていたのではないだろうか。悪因悪

果譚の説話には、悪果の性質と悪果を受ける中で救いを得る方法の二つについて語られ、果報との付き合い方を説話によって示そうとしているようである。同じ殺生の罪を扱ってはいるが、28・29はどんな者でも悪果を避けられないという悪果の性質を示すため悪因果譚の冒頭に置かれ、30・31は別の生涯で善業を作ることによって救いを得られるということを示すため採用されたものと思われる。

32、33は30・31に続いて、悪果を受けながらも善果によって救いを得る方法を話題にしており、こちらは悪業を作ったのと同じ前世で善業を作っている。特に32では〈懺悔〉という、悪業を作った時にのみ有効な善業の作り方を話題にしている。〈懺悔〉というのは新日本古典文学大系三三『今昔物語集 一』の脚注によれば「身・口・意の犯したすべての罪過を仏菩薩や僧尼の前で告白し、許しを求め行爲（一八三頁）」と説明されている。32で懺悔が出てくる場面は、達王が山の中で辟支仏に道を尋ねた時、辟支仏は病気のため手を挙げられずに肘で道を示した。王が怒って辟支仏の肘を切ると、辟支仏は王に懺悔を勧めて神通力を見せた。王は過ちに気付いて辟支仏に懺悔を受けるよう頼み、懺悔をすることができた。辟支仏は王の懺悔を聞くと涅槃に入るが、王はその場所に塔を建て、さらに懺悔を続けた。すると懺悔をしたことによって、師質に生まれ変わってから肘を切られるという報いを受けたものの、地獄に堕ちるという報いは受けずに済んで、その上阿羅漢果を得ることができたという。辟支仏が王に懺悔を勧めたのは、王が辟支仏の肘を切ったことが重い罪であり、その報いを受けることになるからであった。懺悔をすればその罪は消えるというわけである。この話では地獄に堕ちるといふ報いが消えたことになっている。懺悔は悪果を軽減させる効果を持っており、さらに懺悔をした当人が阿羅漢果を得たことから、善業であるとも言える。この話では悪業を作ったのと同じ前世で懺悔をすれば、悪果の軽減と善業を作ることができるということが言われている。33で扱っているのは懺悔ではなく、悪果の軽減は見られないが、悪果を作ったのと同じ前世で別の

善業を作っている様子が見られた。この話に登場する赤ん坊は前世に、二枚舌を使った罪によって現在舌と両目・両耳が生まれつき備わっていないが、同じ前世で国の賢人として国王をはじめとして国中の人の信頼が重く、しかも徳が身に備わっていて人に物を施したために現在宝の持ち主となることができたという。つまり人々に信頼され人に物を施したことが善業として現在に影響し、悪果を受けながらも経済的には恵まれているということで、悪業を作った生涯で別に善業を作ることが未来世に救いとなることが言われている。

34〜37については、今度は罪の内容に話題が変わっていて、僧に對し悪い態度をとってはならないことが言われている。34は僧を罵ったこと、35は（主人公である妻が）夫が僧に金を布施しようとしたのを怒って止めたこと、36は僧を罵ったこと、37も僧を罵ったことが悪業として取り上げられている。この説話グループの最初である34と最後である37では、「此ノ賢劫ノ千仏ノ世ニ、猶此ノ魚ノ身ヲ不脱レズ（一九二頁）」とか、「我レ此ノ餓鬼ノ形ニ生テ以来タ数千万歳、此ノ苦ヲ受ク。又此ノ命尽テハ地獄ニ墮ベシ（一九六頁）」などと書かれる一方、救いが全く書かれない。おそらく悪果を作ったまま何の手も打たなかった場合、救いはないということが示されているのである。35と36では善業と見做される行為をした、あるいは前世において懺悔していたため、救いが描かれている。僧に悪い態度をとることが悪業であるとされてここで取り上げられているのは、20で話題にされたように善業を作る時僧は親切にするべき対象であり、僧に悪い態度をとるのはそれに反することであるためではないかと思う。

38、39は物惜しみをしてはならないことが言われている。またその一方で、38では悪果によって盲目の乞食に生まれ変わった子供が釈迦に会い、前世で自分が物惜しみの悪業を作ったことを聞いて懺悔したため、未来世に地獄に墮ちるといふ罪を免れることができたと言われる。悪果を既に受けている生涯で行う懺悔も、罪の軽減に有効であるということがここでわかる。39では懺悔はしていないが、罪を作ったのと同じ前世で両親のために功德を作っ

たために現在悟りを開くことができたという。33と似たような話題であるが、39では故意に母を餓死させており、両親のための功德はその償いとしての意味を持っていたとも考えられる。38、39で物惜しみを悪業として扱っているのは、8、10、11、13、14などで布施が善業として挙げられているので、物惜しみは布施をしないことにつながり、善業を作るのを拒むことが悪い行いであると見做したからではないだろうか。

40の登場人物である富那奇は前世に阿羅漢を罵ったために非常に長い間生まれ変わるたびに奴隷になっていたが、主人に許されて出家したところ阿羅漢になることができた。阿羅漢になれたのは同じ前世に多くの人々を誘って共に、荒れ果てた寺を修理したという善業を作っていたためであったが、阿羅漢になった生涯というのは、前世に作った悪業の期間が終わるというタイミングでもあった。前世の罪が清算された後に阿羅漢になったということである。この話は「又、昔シ諸ノ人ヲ勸メテ寺ヲ修治セシガ故ニ、前ノ罪ヲ償ノヒ畢テ後、我レニ値テ道ヲ得ル也（二〇一頁）」とあるように、前世での悪い行いによる悪果は、一定期間受け続けるとやがて罪が清算され、その悪果がなくなるということが書かれているために採用されたと思われる。この話によって悪果には期限があるということがわかる。一度作った悪業は永久になくならないわけではないのである。一方41の登場人物である婆提長者は大金持ちであったが、物惜しみをする気持ちが強く、妻子・眷属・兄弟・親族にもわずかの物さえ与えず、自分のためにも贅沢をしなかった。死後は財宝を全て没収され、叫喚地獄に堕ちたという。長者が財宝に恵まれていたのは、前世に辟支仏に布施をして、未来世に布施をしたいという善い願いごとをしたためであるが、後に布施をしたいという願いを一部変更して、沙門には布施をするまいと誓ったため、長者に生まれても物惜しみをすることになった。そして物惜しみをして悪業を作り、善業がなくなっているにも拘わらず他に善業を作ろうとしなかったために地獄に堕ちたとされる。この話は「婆提長者、本ノ福業ハ既ニ尽テ、新キ福業ヲ未ダ不造ズ。亦心ニ邪見ノミ有テ、善

根ヲ断ゼリキ。命終シテ叫喚地獄ニ墮タリ（二〇二頁）」とあるように、前世の善果にも必ず終わりがあるということが書かれているため、前話と合わせて採用され、卷二の締めくくりとして置かれたと考えられる。悪果と同じく、善果にも期限があるということがこの話によってわかる。40は悪果にも必ず終わりがあるという希望が示され、41は善果にも必ず終わりがあるという警告が示されている。卷二の最後に選ばれたのが希望の方でなく警告である理由は、一つには卷二の構成では善因善果譚が先で悪因悪果譚が出てくると同じようにしたためであろうが、撰者が善果を作ることよりも悪果を作らないことにより強く関心を持っていたからではないかと思う。

28〜41までの説話配列をまとめると、28・29はどんな者でも悪果を避けることはできないということと、殺生の罪が最も重い悪業であることが表現され、30・31は悪業を作ったのとは別の前世で作った善業によって救われることがあるということ、32・33は悪業を作ったのと同じ前世で懺悔をする、あるいは善業を作ることによって救われることがあるということ、34〜37は僧に悪い態度をとることが悪業を作ることになるということ、38・39は物惜しみをすることが悪業を作ることになるということ、40は悪業には期間があるということ、41は善業にも期間があるということが表現されていると考えられる。28・29の〈悪果は避けられない〉というのは、善因善果譚の24・25の〈善い行いの果報が逆境時に失われぬ〉と同じく果報の絶対的影響力について言及するものであろう。悪因悪果譚は全体として、悪果は何もしなければ確実に現れるが、懺悔、別の善業を作るなど、何らかの手を打てば災難が軽減されるということを言いたいのかかもしれない。配置の問題として、悪業が挙げられる28・29の次には同じく悪業が挙げられる34〜39を置くべきであると思われるのに、実際に28・29の次には30〜33の〈悪果を受けている状況で救われる方法〉についての話が置かれているのは、28〜33で扱われる最も重い殺生ほどの悪業を作ってさえも救われるのなら、34以降に扱われているような他の軽い悪業は言うまでもなく全て救われるということが保証される

ため、重い悪業のところ敢えて扱われたのだと思われる。

以上で卷二の説話配列の意味についての考察を終えるが、前世の話である善因果譚と悪因果譚がそれぞれひとまとまりになって、善因果譚が先に、悪因果譚が後に置かれた理由について、考えてみたい。卷二の冒頭で釈迦がまもなく涅槃に入ることが明かされていることは既に述べた。卷二に設定された時間から考えて、卷二は釈迦という救済者をまもなく失うということで、単純に言う心安感と希望の時代から、不安感と絶望の時代へと移り変わる様が描かれているのではないかと思う。そのため卷二の前半に善因果譚という希望のある話題が、後半に悪因果譚という不安を煽る話題がそれぞれまとまって置かれているのであろう。善因果譚の話数が悪因果譚に比べて多いのは、卷二が釈迦の死ぬ時期である卷三の後半からまだ遠い位置にあるために調整されたのである。

悪因果譚が後半に置かれた理由については、もう一つ、撰者の関心が高かったために後に置かれたということが考えられる。卷一の構成を考察した時、各説話群の最後に必ず悪人が救われる話が置かれていた。そしてそれが撰者が最も興味を持っていた話題であったことを先に述べた。このように撰者はより関心の高い話題を後の方に配置する傾向があると論者は考えている。そのため悪因果譚、つまりいかに悪果を避けるか、また悪果を受ける中で救われるかといったことが、撰者にとって最も気になる話題であっただろうと考えられるのである。それに善因果譚に描かれた善果の中に、「悪道に墮ちない」というものが多かったことからも、悪果を受けないことへの関心が高かったことがうかがわれる。そのため撰者にとっては善業を作ること、悪果から身を守る一つの方法としても理解されていたように思われる。

撰者は卷二を構成するにあたって、釈迦のいなくなった時代に、人々がいかに善業を作って、その上でいかにして悪果を逃れるべきであるかということを教えようと考えたのではないか。そしてできることなら人々にどんな小さなことでもよいから善業を作って善果を得て、悪果を受けないようにしてほしいと思っていたことが考えられる。善業作りに要求されるレベルの低さや悪果に対する救いなど、救われるための方法を行う者が不安に駆られないよう、安心して方法を実践するための配慮が随所に見られることから、撰者は人々に救われるための方法を実践することを強く望み、多くの人々の幸せを願うような人物だったのではないかと思う。最後に、巻中の大説話群を成している善因善果譚と悪因悪果譚は、単に善業悪業の種類を並べるのではなく、その本質を伝え、救われるための効果的な方法について指し示そうという工夫が見られ、苦心した末の構成になっていると言える。

〔注〕

- (1) 国東文麿『今昔物語集成立考〔増補版〕』（早稲田大学出版部 一九六二年 八十〜八二頁）
- (2) 池上洵一『今昔物語集』の世界 中世のあけぼの』（筑摩書房 一九八三年 二四四頁）
- (3) なお巻は漢数字で、第一話は1というように算用数字で記した。
- (4) 『今昔物語集 一』（前掲書）の「涅槃シナムトス」についての脚注三三には「ここでは入滅、死去の意」（二〇六頁）と説明されており、論者もその意味で理解している。
- (5) 竹村信治「物語の場としての説話集―今昔物語集天竺部をめぐって―」（平安文学論究会編『講座 平安文学論究 第四輯』 風間書房 一九八七年 五二頁）
- (6) 卷二の1には父のために釈迦が霊鷲山から迦毘羅衛國まで牛車で五十日ほどかかる道のりを、父の危篤を超

能力で知るなりすぐさま駆けつけ間に合ったという描写があり、40には阿羅漢の富那奇が遙か遠くの釈迦に祈ると、釈迦が超能力で祈りを感じし、超能力を使って（空を飛んで）やって来たという描写がある。

- (7) 拙論『今昔物語集』巻一における撰者の構成意図」（『文学研究科論集』一六 金城学院大学大学院 二〇一〇年三月）

- (8) 親子関係の話題は『今昔物語集』の中でも特に関心もたれており、1、2、4に見られるような釈迦の両親の話や、14、15のような親子への生まれ変わり、39のような母を苦しめ殺した話などたびたび登場する。
〈善い行いの果報が逆境時に失われない〉というのは24、25、40の話題に共通し、これも撰者の関心の高い話題であると思われる。この話題は特に普通なら死んでしまうところで命が助かったという形でよく出てくる。

- (9) (7)に同じ。

- (10) 〈悪道に堕ちない〉という記述は、8、9、10、11、13、15、17、18に見られる。